樗堂句集

全

911.3
チ

鶴岡縣管下第五大區二小區

羽後國飽海郡 砂越村 富樫仁右

鶴岡縣管下羽後國飽海郡

鶴岡縣管下羽後國飽海郡砂越

明治第九年五月

序

昔 之 異 謂 其 博

鶴岡縣管下第五大區二小區
羽後國飽海郡 砂越村 富樫仁右

鶴岡縣管下羽後國飽海郡
鶴岡縣管下羽後國飽海郡砂越
明治第九年五月

序

昔者。蕉翁之没。門人傷逝感舊。發之詠哦。其辭淒惋。載在蕉門諸集。異乎夫師死而倍之者矣。余竊嘗謂。蕉翁遊季吟之門。別開一派。然其自有師承。必渉紫史等書。聞見博洽。又其遊囊中。以杜律及白氏

鶴岡縣管下第五大區二小區
羽後國飽海郡 砂越村 富樫仁吉

鶴岡縣管下羽後國飽海郡
鶴岡縣管下羽後國飽海郡砂越
明治第九年五月

三 お六とき櫛

一 此お六櫛の儀ハ古来より秘方ニて
みね木をもつて水にて揉きよめおゝされ
ハことに妙なる櫛ニ御座候何乃とうぞ
おどれ御洗ひくらべ御揃て御求下され此
品世間ふにやいる櫛と出来候へ共
見よいこ様そうござりまする御座候よし
格別ニ違ひござりまするとくと御吟味遊
御求て下され

木曽藪原宿
本家請合 十三屋傳平

舊發
諸集。
竊嘗
泒。然
聞見
白氏

文集從。則源泉之遠而不竭。良有以也。吾鄉德田椿堂。湖其流揚其波。積年之久。名噪四方。向嘗訪吾四巷廬。一見之際。余未能測其深淺何如。蓋想青燈雨夜。試與之談風趣。亦必能獲我心矣。今茲椿堂奄逝。幽明一隔。余非無感。其徒松坂長井芙蓉。近因椿堂有所托。將刻其撰集。介北川某以乞余序。斯舉也。終始之不渝。足以追蕉門之遺美。故余嘉嘆而序之。

乙酉嘉平

四巷處士韓珏撰

内姪孫公裕書

桂堂句集

春　　弥童芙蓉輯

立春

晴りしけも人のこゝろ結ぶの春

元旦

えるやたのまるくもの古盒子

芍蔦

非恒のうちふきこゆる菊式

桂堂句集

春　　　　弥重菴輯

立春

照りけさ人のこゝろ紅白の春

元旦

元日やたのまうてもの古盒子

薺

菲垣のうちふきこゆる薺哉

あまけく晴る色こそしるる萬は
夕月や根芹ぬく宇戸にまろく
一万宗

橋のけく一万宗毎通て山家は

梅

風月の梅ぞ川清し 春從
あかね色や梅をさしぬ形のの上
升鳥やうえのもとまて 一春里

梅ぬ夕日升のあかし秋宵くら
二節まうみえしはつ宮小河の秋
月の梅ぬ隈見えてあるつき

鶯

うく出るや橋もよ紀極ともろ
鶯や鳴く志まへ八寸のかくたれ
鶯や鳴く杉の本ちまく
来ならへりて肉外の清遊

嘗しいそれ々秋ハ

鴬やとゝのへし秋大工達

柳

まゝ橋や上る下荷の京の町

乗さ?れりしちゝく柳の葉々乱

旧隅より秋ちゝよ移る柳哉

桔梗

赤桔梗ハ乙れまても咲けり

猫の恋

恋死ちまて猫もききしょ今の月

〃 蔦

蔦やちゝ色のにもかれてはく

朱雀野にあゝ笠あ?ゆ上へ下

春雨

生まれ大津ちまてや春の為

春てかげ件の子玉本まての母

春の雪

かつきえつゝも積かね春の雪

春の水

流れゆく古き節より春の水

春風

梁舟の帆にあくやはるの風

花

なくはるにまよひ入桜かな

笑やる阿呆やまれまくも日

木のまゝを空まゝたるさくらかな

取あへず茶を煮て咲る桜かな

散さへもおしくふるゝしはらゝ哉

ぬれ描ちる色も雨に摘桜田

恐地ても一族の勇名をとるも

結発してあらしを落しぬ

雲ゝ山さかりゑしさかりかな

涅槃

ねる日のしら露あらそふ涅槃像

帰石

小さくや石とみえても森のかくみ寒

卯の花の垣根に牡丹しらへる石

葉笑

なれむめのちるきや鴬の鳴とまる

荳

二見形やちらされ流て雨さくら

ゆるぎ松を都につまるすまれ哉

梍

月おろとて梅いそかしう茶にかう

雛

立よりておもかけひろけ古雛

數矢

ちれは又たゞ有明のひとくさ

田螺

田にし啼ともしれ末なり大徳寺

雉

きじ啼や尾上の杉を幾度に

蛙

飛こゑハ庵よりも浮かき鳴に

暮春

はまも杖ふしらぬくれの春

夏

更衣

猶鬢のしろく見えけり更衣

卯花

うの花に似て紫づく垣根かな

時鳥

ほとゝぎす声の内ちかう浮きたれ
庵の上や水を隔て啼わたりけり

ましてふる子生れけるほとゝきす
市中はなかなかそて涼しき紙
神垣や古葉ちる世の座る
釈迦ちりしは法にあらけ附る

若葉

山を出る青葉にまさる若葉かな
雛る山むしろおしの若葉かな
芳雅庵呂丁

風月は見ぬ山椒の門の若葉かな

灌佛

浴る日枝のほとけの産湯哉
豆植る中も卯月八日の雨

短夜

夜短は露に乱ても明よなる

夏の月

なつの月松より出ぬまや又ぬ

夜八百よまはる時ありこその月

鶯子

呉竹の代々とも中き菖蒲哉

石を重ねて山となしけり

を湛て時とこそ四時の峯

末かゝるくる月雲そ

以庵よ出る虫か

菖蒲曳沼の泥も移りけり

七栗溜泉

出と人のあや糸投けり舟に

英菓々之男初幟を揚けり

綱つるや三郎と郎か幟竿

蘿子

存分し備ゆく我さね蘿子に

鶴

精の業をさへなくえて色よなか

手枕のいつしかなしや鶏綱綸

罌粟

刀はきて大工ゝ門やそしきけ

五月雨

蔦の小蓑かけるや五月る

さみたれや咲ふく枝もて軒の端

蛍

あ治のふちみさしかる花蛍

田植

たちゐる鷺もまくみる田植かな

子雉

月さしや子雉のちゝる麦まて

枝のゆくちるた子雉のはゝそ

竹陰の筍

持しよきわひものなきん竹のかう

竹の子みせのむつましきくゝ

まつかきんしく斎主てる志さ
米つもれきのはかまゆ山
のとれりきらしられく
やくそくや牛の子守ハ糕れ後

呼子鳥
呼るやら雨りまちかね呼子鳥

茄子
猿くつしまれて摘み茄の子哉

姫生
稚生海ぞし大さ引味の郷

昼顔
鼓子花のやまもちぢらし暖地風哉

夕白
夕顔のある花多し明日ハ瓜

瓜
瓜のころろ瓜割ちらし髪ノ念

欅

咲日よりちるゝ根くしなる欅かれ

蛍

枝もきつら蛍の宿に夜に入り

蝶

蝶のなきさ柱の蝶をみえてをかね

松奥

蠟燭をてらしてそや窓やの灯

蓮

舟あらや蓮にかくれて人をよふ

雲林峯

雲の峰牛の影落ぬなり

清水

蕣ふきれ葉も吹出を清水哉

苔の花

永ふむ昔ひ篇くなる苔の花

納涼

先さゝし松かけにおく硯筥

まくし清を卸くおられ侍ぬ哉

涼菓

むまき鳴や鳩の菓まとひ一つより

色あさら人生てめくなき涼菓哉

清秡

中ゝか来く馬より下る清秡哉

秋

立秋

淋立や啄木鳥かとも此ゆ子へ

あさ立や梅し競る八重葎

七夕

手ならひのかゝる文字ならまの川

祝亀に星の池ある子供哉

松川にいきひく星のてよひ哉

芭蕉

影白のいろ〳〵様ハあまくもあれ

朝かほの咲きれまさる山家かな

萩

五六軒蘇のたれぬむかし流の飛

おもしあひろく狂言よきむ萩の露

ちく蛇

むつゝしき気ひておくてもちくお

手まくらや手よ吹風にまてさき越

惟風

作山寺魚切ちくや何さ秋風

荘

軒の萩鈴かりハ安らかし一夜

渡る

甲斐か根おろしそれくおし渡る

画眉鳥のけさまちかくみての[illegible]

鴫

夕まくれや鴫たつ沢はさひしかり

雁

きのふや松のむら雨はれましく
横雲よ立そみえつゝ小田乃雁

荻

麻の葉もそよく山おろし吹けり
荻のうは風ちるねさへ定めけり

ゆふけ行の芝生のあはれ荻の上

擣衣

五衣きぬたのをとふ山かぜ
宵うちやまぬたの中にも遠かね

虫

きりきりすよわりゆく秋のなくかな

夜寒

此宿へ舟の夜さむにまさりけり

秋の夜

燈の本やすゑて頭味噌音

月

さまゝの影もあはれ今宵の月

名月ハきのふや夕暮よけふの今宵

秋汲の言ゝきゝね月見哉

名月や中年の家のたしら建

名月やこゝろ楽たる○ハ泥たらか

二さんまで尾手かくへる月見ん哉

いさよひハ蒲壺の余るつき見ん哉

よくこれハ月も降こむ雨戸ハれ

稲

舟よきく稲かそゆくや浮清堂

秋の暮。

秋のくれ幸山枯をあらしの秋

きみすくとら先生ちから秋の暮

鳴子

驚いぢまかくきられる鳴子かな

菜

西吹やもるれし飛る菜の花

菜の後鶴のかしられ粒赤く

打流る屋なちるらの畷菜哉

文庫菅神奉納

ふるひ出く天の川星や菜の花

十五

清流の秋篝こそ相子鼻
よふ船なく行く三津みち
まうたよる明日も秋時変ま
むかひ合せふく舟人うや
ふく見えて
からるの小路まく帰るや秋の暮

秋流

誠みし流外あつまく秋流ゝの飛

鳴子

驚ぬもまかくきれる鳴子哉

菜

西明やもられうし飛る菜の影
菜の葉鶴のかしらも秋赤く
打流る庭むちつるの明菜哉

文庫菅神奉納

ふおひ出く天川早や菜のふ

十六

莵莵も嘆の毒子なし遠きを
く泊和坂環お家事にあふ
良真

何事にも氣をやき月よ十三夜
子紫

高野のかみも旅喜に告けり
並杉

此嫁の見るまなし添ふる月哉

冬
時雨

江の上やしくるる山のもみちわ
るもなく降込てしるもしく尓
大淀は今朝しくれ中川哉真人
ともに濁ん旅人よのふし時雨
加留深の見をもやましくれ北
志くれは新しも後学の門

水鳥

あさかや静る浪もしらるし

桔あし

瀬ふとかへ菴もしは八落るなり

千鳥

笠寺やをりしの雪に鳴千鳥

此扇ハ千とりしやまる桂ぞ礼

松の背をつかむくやる千鳥哉

桔邦

大船を造りし上て済ぞうれ世哉

小麦

ふきるすて居るき八二日降りけり

楷也

一日能葉のしも帽るわさるを那

夫やしと月日ハ長し楷の上

生法氣

老出しくもろき生活嵐かれ

炭

炭こおしくくゆくや奥の院

四ツ辻や何処へもやらぬ炭車

鞁

あのまゝをせつひよ今節の極

恵比須講

生れきて何日数の中や恵ひす講

冬篭

冬ちも里松島まくの思ひさく

冬籠乾してまた八ま又来る

冬月

高く出て夕暮八分し冬の月

木々落

花つくしや手つ定る枝の色

冬木立

いねよくもよし眠よくみる冬木立

帰花

花こそハ咲くるなら帰され

落葉

村の義を紀ふかつ子集て遊ひけり

根もとつる今舩ハ屋根より落葉哉

掃よせ〳〵菜株のふもとおち葉哉

網代木

茶たれ森栄えもあらん何しろき

火桶

日暮の人も朝深くせむ火桶かれ

納豆

寺納豆山らしきまけど叩きけり

夜着

多度山を座右に於くや夜着の裾

雪

ちる雪やとつさり降て言葉なし 紀
暮雪のする小半けり雪之日
夕ぐれや又来の子るゆきさ笠
かゝやきて汲りし流るゝ雪の山
宵月やむら降したる雪れ門
帰るより和て首途て雪の舟
ふるまつて汲さそへ雪見ゆ亀弐
猫八

猫ハや傍ひ絆してる芋から
錺散
九重や清き御前にて絆して来
猫まてハ宵のさやさや絆てま
湶拂
雪まもつ月小さきまれ小まて第
また掃や恵りて入る隣神縁山
年の市

櫓柏子やとし越市舟おもしろう
そろ兆の猿ハふけるゝ家桜
宋常　ゝ志
ワかれうる丸年ふるさと月と空
いく度もまたこん年ハ暮に分
年の尾のあらしや表ハ交くに
赤枝はらくとしもみ敷行分

大和路御のと紀
青何法師
え日ハ梅のさくちらよし野山
春がすミ峯にたなびく降よふ
きさ甲や松のみどりなき雛子
かひとつきかくしたあへを初桜
松島路御の附
飛龍嫁冊きらしの上や家上や

山梔子の宮はけさふ破の夢なれハ
　鴫立沢西上人の像を拝みて
うらやまし愧かし狂も旅まくら
白雲の四月ちりけりするか川
冨古島嶠首さてゑるも香らけ
　仙臺へ入
松風もおやゝふくほとちりよなり
　葛の松原に入　覚英上

　人の識もうしけらくなあらゝ
　夜ありつる月しあらしと
以へとも書帽の終りり
けうおかりふ蓮華山ハ昔の宮
　木下の国分ちハ弥基菩薩
　の定ま志ちかてきって
たのもしや廿四坊の栗花
　南山客安楓ゝ与は雪ふれハ

紛白の雲もかゝりけるは闇となる
草葉につゆしやどる蓬茅
むハくと鴫のたちゆく西は

菊まくら萎ぬるもれハ採られ
淋しさや小庭たくは秋鳴る
山姥は身をおし果てけりの姿
　萎覚を出る水きき
此きを見きハ世ハ露の秋の名
旅人をなやまし荻のほつき哉
一声く森きね絃鳴の落り和
寺の前の菰をまつの井を遊び

涼まつこゝろくかなしそ
雲晴てもみちを採る五月る
松島やゝつしまハ世にしられくもれ
伊勢國萱守居のとき
もとみすと志れハそ月も芋の菴
給白ハのかふもかゝけよ門を志ろく
芭蕉やつ据かしやふる菴乃那
色ハくと鴫のゐちゆく西日ふ

蕣まくら夜くるもれハ擬ゝ乃礼
淋しさや小庵さく日鳴る
山路ま分をわし果てけるのふ
萱堂を出るふるき
出きともきハ世ハ夕風の秋のゆき
旅人をなやま萩の行つさ哉
一鳴く森きね後路の落月秋
京ふ見の芸をふの井をる行なか

丹波国陽なる寓居の記
有縁るものハしられのゆふへにみし
冬の日やいつきをにて女郎花
木からし小笹へる尾もちらけり
古くるや蕣のうへかハまて花の種
おちまし人と出家しけしく
梅ふかく松もしろきこらくハ
寄しと枇杷園より寄信家

父のなしは聞子も黄金二
おもむきは待るふくやて行し
さいなんろ行くなたらしは
狗りしせまり只来世を世多
あらし気佛をかのこ
菴むすふちきりかし今や冬木立
ゆくとしをたく来たしや茶木烟
月ハ冬れとし然やつもるし

としつもれば慈父よ新
寄る子にまよふ後ハ墨まし
陳しもあかきハ白髪よりも
酒を一つさましや百行いつつ
らふおし果めるすの悲し
はかし折りしなく縄張も
なおき西の空を恵方と定
兆ん奈子急佛をとおへる

ぞんはや耳きく給ふれてる
むきやましうき世は生る春の水
おもしハ墓石巻の前の七
とせ余りあるき給ハ
桃杉園の家の遊はひとく
さむ久まくふくれある
こかし迷ひんとゆるあ
まれつし思ひ出られたる

きみゆかく書信来し釈友
もちや半きるく筆とれと
ねこ家かけひらきれらへ書
見もいつまてら身に添人となる
今子ハ歌人を先立て哀傷
作以つらく人ハ歌に於て作ある
偽帰きん事事一ト作佛
世にしのこと難かしらなる人よ近きくる

木からし風のさそへるよみ
終りし西上人の言葉をめて
みし小鼻をうこかし居けるに
無造作に人ひとしれすなる
其のうちえに後あしくハなく
そんな事もしそれ便りのいたる
日向作の素顔をうけて一眼
眼をひらき一寸文中尋くかえ

木からし風のそえたるとかは
後にハ西上人の言葉をぬきて
みゝ小鼻をうごかし痛るは
無造作に人をかゝらはなる
生のちからハ後あとしハなく
とくりわしくを抵便宜の一併
日句作の志穀をうけて一服
眼をはなしき文中年くかれ

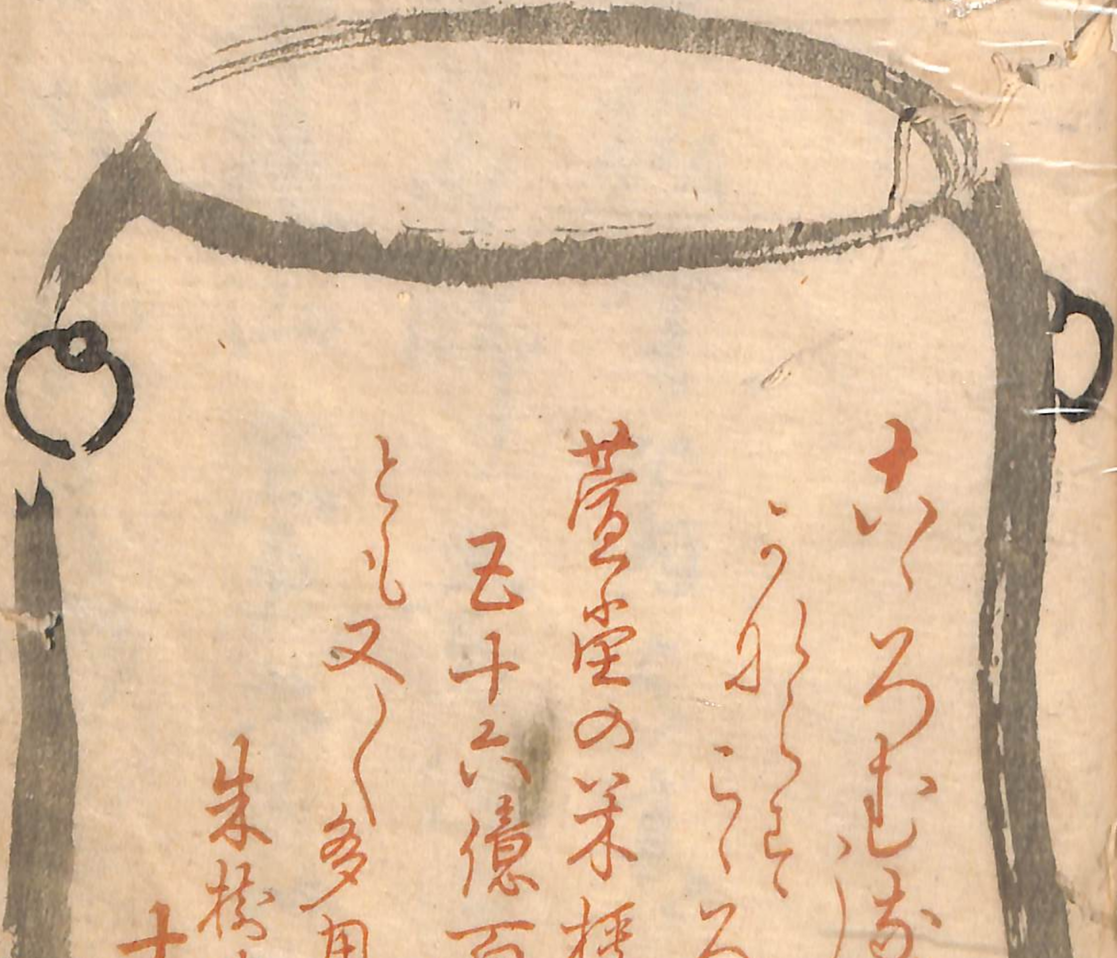
清阿法師艶記

寛政元とせ六年秋ころかとよ
まか清阿といふ僧あり菩提山
の落葉茂りし笹庵のもと　内外の道
形りし千日余りもみつすみをさし
てけるかゝるあまたさかしき六の
艶を着てしつけしおとしける
常縦し来る珠を入る数の香

つもる人をいとひ出されてより歳ゝ
枇杷園中の客を迎ふる歳ゝ
楽の扉をひらき花むしろしきて
筆を嗜へきをもとめねと
家不知足を示の釈友より
月もひとつかな子も一山茅の庵
戸によもすから楽ものゝ月を附たる

有阿法師瓢記

寛政元とせ六年はかりさきつころかとよ
ま阿法師とよふ僧あり菩提山
の藤嶺に草庵にすみて　内外の道
にあかし千日参籠の行をとけて
くけるかもちたる杖の
瓢を首にかけて杖とし狂
歌にあそふ米を入る瓢の辞



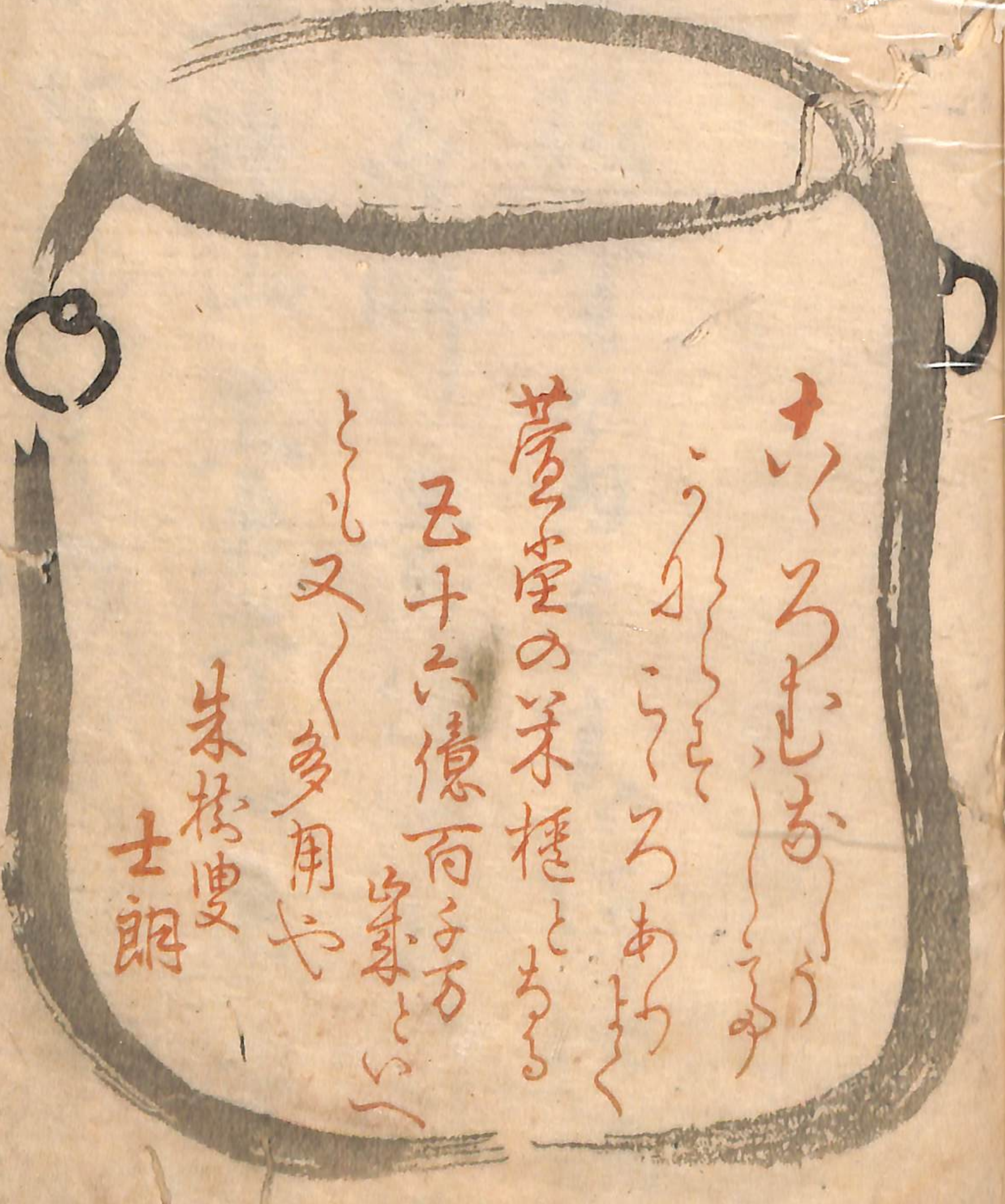
さくろむすびか
うれしきしるか
こころあわく
蓬屋の茶種とある
五十六億百千万
年といへ
としく又多用や
朱樸叟
士朗

衫の緑きる日に梅堂ゟ寄こしきて
くたるをむろひくかく松花
まちかなすつけれ

朱樹叟

寛政十一年正月

匏圖并銘



跋

巨椽堂翁之書阿法陀
友善師堂住于静陽
菩提山豊堂一旦叢
頒梓敦之鬻集拝

内外書一千日及翻譯
付属家拋龍帝釋之他白
首為年出照至龍四是
玄阿之集物令以諸手
請寶主之善龍王鏡

及至皆以記朱樣收之
業讀也龍中莊嚴衆
一色是集衣珠傳行之
遺教以爲文閣余因無
傳者阿之佳句數之子

美之撰白之而未采以收
之焉文泥而已及写之
趣業迺之合華乃收之
英之上之冊子鳴乎固
難以在手傳写其旨哉

吾庵山人之瓢而已哉
文政乙酉之冬
北童案艾笑浮浅

鶴岡縣管下第五大区二小区

羽後國飽海郡砂越村藤三櫻次

山形縣下管第二大區三小區羽後國飽海郡
砂越村 杉勇昭須
仁吉

國學院大學圖書 第6427號 受入 昭30.3.14

鶴岡縣管下第五大區二小區
羽後國飽海郡砂越村 藤三樫試